

親子運動遊びの継続的な取り組みに関する実態調査 －保護者の意識に着目して－

A Survey of the Continuous Action of Parent and Child Physical Play
– Focusing on the Consciousness of Parents about the Continuous Action –

柳瀬慶子

Keiko Yanase

中北和子

Kazuko Nakakita

吉岡陽子

Yoko Yoshioka

山中梓

Azusa Yamanaka

江崎佑依

Yui Ezaki

(要約)

本研究は、継続型の親子運動遊びの取り組みに関する実態を把握し、取り組みにおける保護者の意識について明らかにすることを目的とした。その結果、保護者の中には時間確保の難しさや体力面の厳しさから取り組みにくさを感じた保護者はいたものの、ほとんどの保護者は意識的に親子で体のふれあい遊びという共通体験することで、親子相互に楽しさを感じていた。また、子どもとふれあって遊ぶ大切さを感じたり、子どもの様子や成長に関しての気づきが見られたりした。さらに、『親子運動遊びカード』の取り組みによって家族が一緒に参加して遊ぶことで、家族全体のかかわりが生まれたと感じていた。

(キーワード)

『親子運動遊びカード』、継続型、保護者

1. はじめに

現在の教育現場では、姿勢を維持できない（低緊張）、動き回る（多動）、動きがぎこちない（不器用）、情緒不安定（愛着の問題）など、子どもの問題行動が数多く報告され、小1プロブレムに関する議論が未だに続いている。これらの子どもの問題行動は、教育現場における生徒指導や家庭でのしつけの問題が原因なのであろうか。A.Jean Ayresは、身体の感覚統合の過程やその産物として、姿勢の維持や集中力、身体知覚、自尊心、自己抑制力などが育つてくると述べている。¹ 中尾もまた感覚と運動の視点から、「耳や目、皮膚（触覚）など、全身の感覚受容器からの刺激が神経を介して絶えず同時に脳に伝達されています。その中から、必要とされる情報を脳で感知するように情報処理が行われています。

（中略）様々な情報を脳が選択し、その場の環境に応じた行動をとっていくことができるのです。このような働きの中で、情報処理機能がうまく発達していない場合を考えられます。」と述べている。² 運動

の発現サイクルとしては、受容系（近接受容器・自己受容器・遠隔受容器）で外界の情報を入力して、その情報を伝達系で脳へ伝え、運動系で外界の状況に対して適切に実施するという仕組みになっている。ここで言う「運動」とは、所謂スポーツを指すのではなく、人間のすべての動きを指し示すものである。前掲の子どもの問題行動は、これらの情報入力や感覚統合がうまくいっていないために、外界の状況に対して適切な行動がとれないと考えられる。つまり、子どもの問題行動は、単なる生徒指導やしつけの問題ではなく、身体発達の問題と考えることができる。

そこで、人間としての進化・発達の視点から子どものからだの発達と運動遊びとの関連を見ていくこととする。人間を生物の進化と照らし合わせると、子どものからだの発達としては、まずは乳児期に急速に近接受容器（触覚・味覚）が発達する。続いて、子どもが這い這いを経てつかまり立ちや二足歩行を行う上で、重力に対してどう自己の身体を立てるかなどの自己の体位の変化を感じる自己受容器（平衡覚・筋肉感覚）が発達し、次第に遠くの物事などの変化も受容する遠隔受容器（嗅覚・視覚・聴覚）が発達して、他者（人・モノ）との距離を測りながら状況に合った適切な行動を行う社会的生物として成長していくと考えられる。³ このように見えてくると、乳時期に授乳や抱っこなどの母子関係を中心としたかかわりあいによって子どもは触覚や味覚などの近接受容器を発達させることが大切であり、乳幼児期に園や子育てセンターなどで親子ふれあい遊びが多く取り組まれているのはこのためであろう。また、こうした幼少期の親子のふれあいは、子どもに安心感をもたらし、他者（人・モノ）への愛着が形成されると言われている。⁴ 乳幼児期にバランス遊びが園などで多く取り組まれる理由も、自己受容器の発達から見れば同様に必要であることが分かる。

そこで、本研究では、入園当初に前掲の子どもの問題行動が見られた市立A幼稚園3歳児クラスを対象に、親子で行うふれあい遊びとバランス遊びを設定した『親子運動遊びカード』を作成し、一定期間取り組むこととした。一般的に親子運動遊びは、園での親子行事や子育て支援センターなどの講座で単発的に行われることが多い。しかし、子どもの身体発達を考えると、継続的に行うことで一層発達へつながると考えられる。単発型の親子運動遊びの報告として、「一度経験した遊びは、家庭に帰ってからも遊びにつながりやすい」という報告がなされている。⁵ また、帰宅後の活用度を調査した報告もあり、親と子の外遊びでは、帰宅後も「よく遊んでいる」が22.2%、「時々活用して遊んでいる」が55.6%、「あまり活用して遊んでいない」が5.6%、「活用したことがない」が16.7%となり、活用して遊んでいる親子が約80%近くになっている。⁶ しかし、その活用期間は明らかにされておらず、単発型の親子運動遊びがその後どれだけ継続されているかは不明である。本研究で対象とする市立A幼稚園も、昨年度までは、年1回の親子活動行事で親子運動遊びを行ったり、家庭向けのお便りで親子運動遊びの啓発を行ったりして、単発的に取り組んできた。しかし、今年度は、5月・6月の計46日間、継続的に取り組むこととした。

本研究は、継続型の親子運動遊びの取り組みに関する実態を把握し、その取り組みにおける保護者の意識について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

市立A幼稚園の3歳児クラス、計41人の子どもとその保護者を対象に、『親子運動遊びカード』(ふれあい遊び・バランス遊び)の内容を親子が家庭で取り組み、カードに「取り組み日」と「遊んだ時の様子や感想」を記述してもらい、平成29年5月31日と平成29年6月26日に担任へ提出を求めた。そして、『親子運動遊びカード』の内容から取り組みの実態を明らかにした。また、取り組み終了後に『取り組み後のアンケート』を保護者に実施し、結果から保護者の取り組みに対する意識を把握し、「取り組みの感想」(保護者が自由に記述)をKJ法で分析して考察を行った。

なお、『親子運動遊びカード』の取り組み期間や内容、『取り組み後のアンケート』の質問項目、倫理的配慮については、以下の通りである。

【取り組み期間】

5月版：平成29年5月12日（金）～平成29年5月31日（水）の20日間

6月版：平成29年6月1日（木）～平成29年6月26日（月）の26日間

【『親子運動遊びカード』の内容】

『親子運動遊びカード』は5月版と6月版の2種類を用意し、図1・2の通り、各月に親子のふれあい遊びやバランス遊びを計4つ提示した。

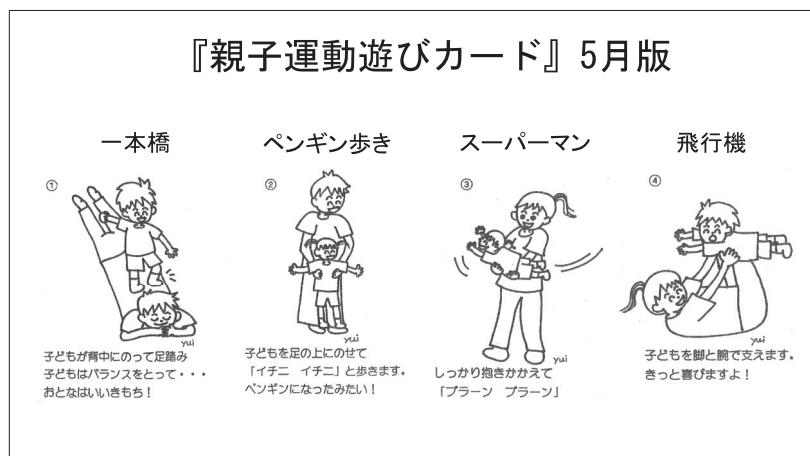


図1.『親子運動遊びカード』5月版



図2.『親子運動遊びカード』6月版

【『取り組み後のアンケート』の質問項目】

- 問1. 楽しく取り組めましたか 〈はい・いいえ・どちらでもないから選択〉
- 問2. 遊ぼうと誘ったのは誰ですか 〈親・子ども・どちらもから選択〉
- 問3. 遊んだのは主にいつですか 〈平日・休日から選択して詳細な時間帯を記述〉
- 問4. 取り組みの感想 〈自由記述〉

【倫理的配慮】

研究対象者である市立A幼稚園の3歳児クラス、計41人の子どもの保護者に対して、取り組みのねらいや研究目的を文書で説明し、研究の中で個人が特定されないことなどの倫理的配慮項目を文書にて提示し、承諾と署名を得た。

3. 結果

3-1. 『親子運動遊びカード』から見える取り組みの実態

『親子運動遊びカード』5月版と6月版から、取り組みの実態を、「取り組みの日数と頻度」、「取り組み相手の人数」、「取り組み相手の続柄」、「各取り組み日の保護者自身に関わる感想」の視点から明らかにした。『親子運動遊びカード』5月版の回収率は約90%、6月版の回収率は約93%であった。

まず、表1「取り組みの日数と頻度」から、5月版も6月版も3日に1回以上の取り組みがなされており、若干5月の取り組み頻度は高いが、ほぼ同頻度であった。また、平日と休日の取り組み頻度を比較すると、休日の方が若干取り組み頻度は高かった。5月と6月を比較すると、平日は5月の取り組み頻度が高く、休日は同頻度であった。

表1. 取り組みの日数と頻度

調査項目	5月版取り組み（20日間）	6月版取り組み（26日間）
取り組み人数	37人/41人中	38人/41人中
総取り組み日数	276日	344日
取り組み頻度	約2.7日に1回	約2.9日に1回
平日取り組み頻度	約2.8日に1回	約3.2日に1回
休日取り組み頻度	約2.4日に1回	約2.4日に1回

5・6月合わせた取り組みの中で、子どもが母親のみと取り組んだのか、家族の中の複数の相手と取り組んだのかを調べた結果、図3「取り組み相手の人数」のようになった。40人中3人のみが母親と2人だけで取り組んでおり、他の37人は家族の中の複数の相手と取り組んでいた。また、その取り組み相手の続柄は、図4「取り組み相手の続柄」から分かるように、母親が一番多く、次いで父親、兄弟となった。祖父と祖母は同数となり、いとこ・おじ・おばが若干名いた。

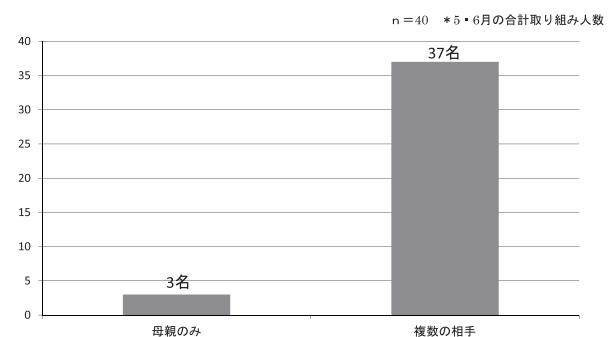


図3. 取り組み相手の人数

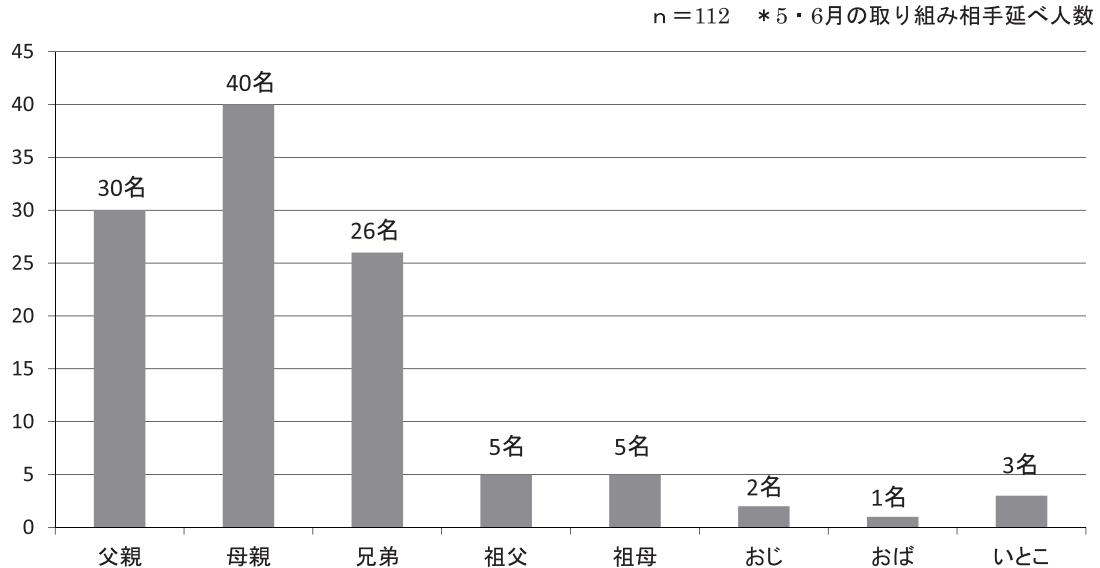


図4. 取り組み相手の統柄

「各取り組み日の保護者自身にかかる感想」は、合計 69 項目あり、内訳は表 2 の通りである。最も多いのは、「保護者自身の体力」にかかる事柄で 26 記述あった。次いで「親子や家族で楽しめた」が 9 記述あった。また、「ふれあい遊びは心地がよい」、「うまく運動遊びができない」、「部屋が狭くてできない」が各 5 記述あった。

表2. 各取り組み日の保護者自身にかかる感想

・「体力が必要、子どもが重い、疲れた」	26 記述
・「親子や家族で楽しめた」	9 記述
・「ふれあい遊びが心地よい」	5 記述
・「うまく運動遊びができない」	5 記述
・「部屋が狭くてできない」	5 記述
・「久しぶりにやって懐かしい」	3 記述
・「子どもの力強さに気づく」	2 記述
・「親の体力アップになる」	2 記述
・「子どもから誘いかけられる」	2 記述
・「子どもにとっては楽しいと気づく」	2 記述
・「子どもの生活習慣がつく」	2 記述
・その他 各 1 記述 「子どもを落としそうで怖い」「しっかりつかまるように助言する」「親が飽きた」「遊びのアレンジを加える」「家族みんなで行う」「魔法のじゅうたんは部屋掃除を兼ねる」	

3 - 2. 『取り組み後のアンケート』の結果

『取り組み後のアンケート』の各設問結果である。アンケート回収率は約 88% であった。

問 1 「楽しく取り組めましたか」については、図 5 「問 1 の結果」の通りである。97.2% のほとんどが「はい」と回答しており、2.8% の保護者が「どちらでもない」と回答している。「いい

え」と回答した保護者はいなかった。

問2「遊ぼうと誘ったのは誰ですか」については、図6「問2の結果」の通りである。最も多いのは、子どもと大人（保護者を含む）「どちらも」であり69.5%，次いで大人（保護者を含む）からが22.2%，そして「子ども」からは一番少ない8.3%となった。

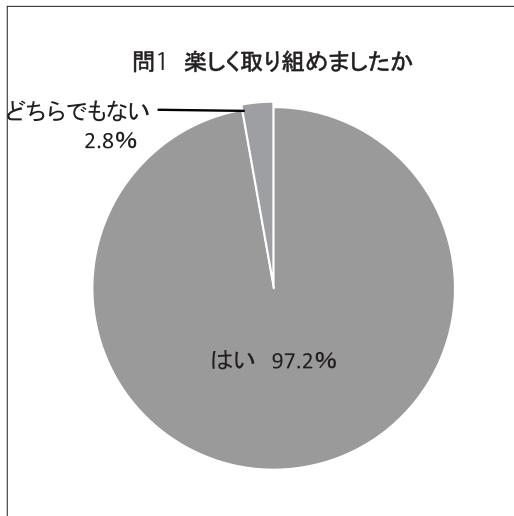


図5. 問1の結果

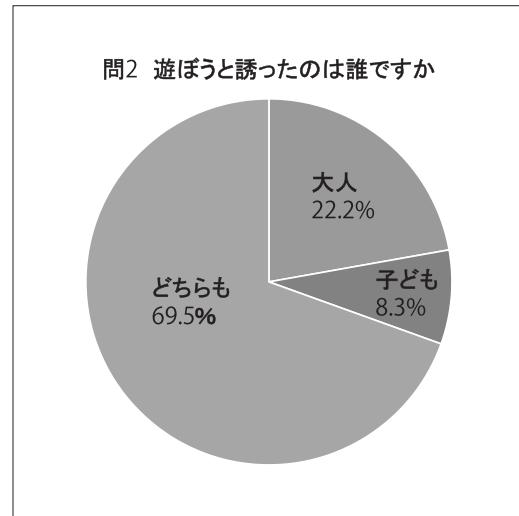


図6. 問2の結果

問3「遊んだのは主にいつですか」という時間帯については、図7「問3の結果」の通りである。平日は、「就寝前」が多く、次いで、降園後の「午後（夕食前まで）」と続いたが、「夕食後」も「就寝前」や「午後（夕食前まで）」と差が少なく、ほぼ同数であった。また、「午前」は通園のため少数で、平日は取り組みの時間帯はほぼ固定しているようであった。休日は、「午後（夕食まで）」が最も多い、次いで「午前中」、「就寝前」と続いた。

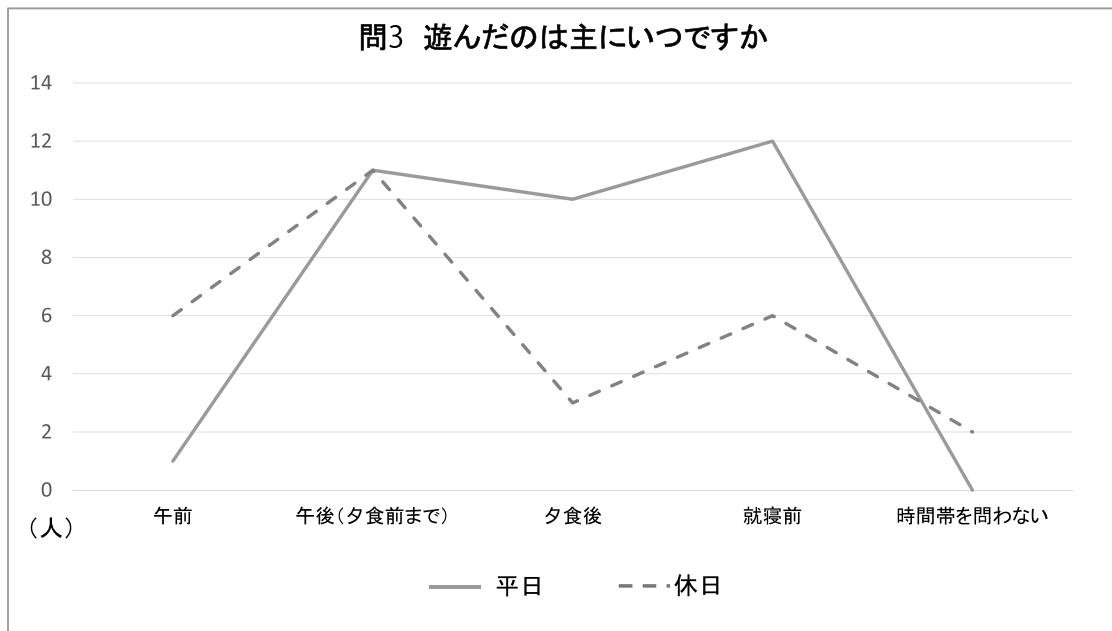


図7. 問3の結果

問4. 「取り組みの感想」については、KJ法で分析を行った。図8「問4の結果」の通りである。

計70項目、20カテゴリーが挙がった。項目数の多いカテゴリーから見ると、第1に、「子どもと意識的にかかわる」(11項目)が挙げられ、子どもと意識的にかかわることの大切さを感じたという記述や、普段は忙しくてなかなか子どもとかかわりが持てないが意識してかかわりが持てたなどの記述が見られた。第2に、「楽しさの共有」(9項目)が挙げられ、親子で楽しめたという記述が見られた。第3に、「取り組む時間がない・取り組みや記入が面倒で忘れる」(8項目)が挙げられ、保護者が忙しくなかなか取り組めなかつたという記述や、保護者にとって子どもと親子運動遊びに取り組むことやカードの記入が面倒に感じられたり、忘れたりしたという記述が見られた。第4に、「運動遊びの楽しさや大切さ」(7項目)が挙げられ、今まで絵本やおもちゃでの遊びが多く、親子で運動遊びはしてこなかつたが楽しさや大切さを感じたという記述が見られた。第5に、「家族の参加」(5項目)、「子どもが楽しむ」(5項目)が挙げられた。「家族の参加」は、家族全員で遊べたので家庭が賑やかになったという記述や、父親は子どもとの遊び方が分からなかつたが子どもとかかわりやすくなつたという記述、また母親についても子どもとの遊びはいつも父親が担当していたが母親も参加する必要があることに気づいたという記述が見られた。「子どもが楽しむ」は、子どもが楽しんでいたという記述が見られた。第6に、「遊びの内容」(4項目)、「今後」(4項目)が挙げられた。「遊び内容」は、懐かしい遊びや簡単な遊びで構成されており、取り組みやすかったという記述が見られた。「今後」は、これからも続けたいという記述が見られた。第7に、「遊びの知識」(3項目)、「子どもの運動意欲」(3項目)が挙げられた。「遊びの知識」は、新しい遊びを知れたのでよかつたという記述が見られた。「子どもの運動意欲」は、子どもが親子運動遊びをやりたがつたという記述が見られた。第8に、「子どもと向き合うことの大切さ」(2項目)が挙げられ、子どもが小さいこの時期にしかできないふれあい遊びがあるため、子どもと向き合う時間の大切さに気付いたという記述が見られた。

その他のカテゴリーとして、「変化」(1項目)、「子どもの成長」(1項目)、「忙しい中遊んでよかつた」(1項目)、「遊びのアレンジ」(1項目)、「保育参観」(1項目)、「園の教育方針」(1項目)が挙げられた。「変化」では親子のふれあいが増えた、「子どもの成長」では子どもの体の成長を感じた、「忙しい中遊んでよかつた」では忙しい時に思い切って遊んだがよかつたと思えた、「遊びのアレンジ」では子どもが遊びをアレンジするようになったなどの肯定的な記述が見られた。一方で、「遊びの内容を変える」(1項目)では、妊娠しているため妊婦でもできる遊びがよいという記述や、「カードの形式」(1項目)では、親が記入するのではなく子どもがシールを貼ったり色を塗ったりするカードにしてほしいという記述や、「外遊びの方が好き」(1項目)では、子どもが室内遊びではなく外遊びをしたがるという記述が見られた。

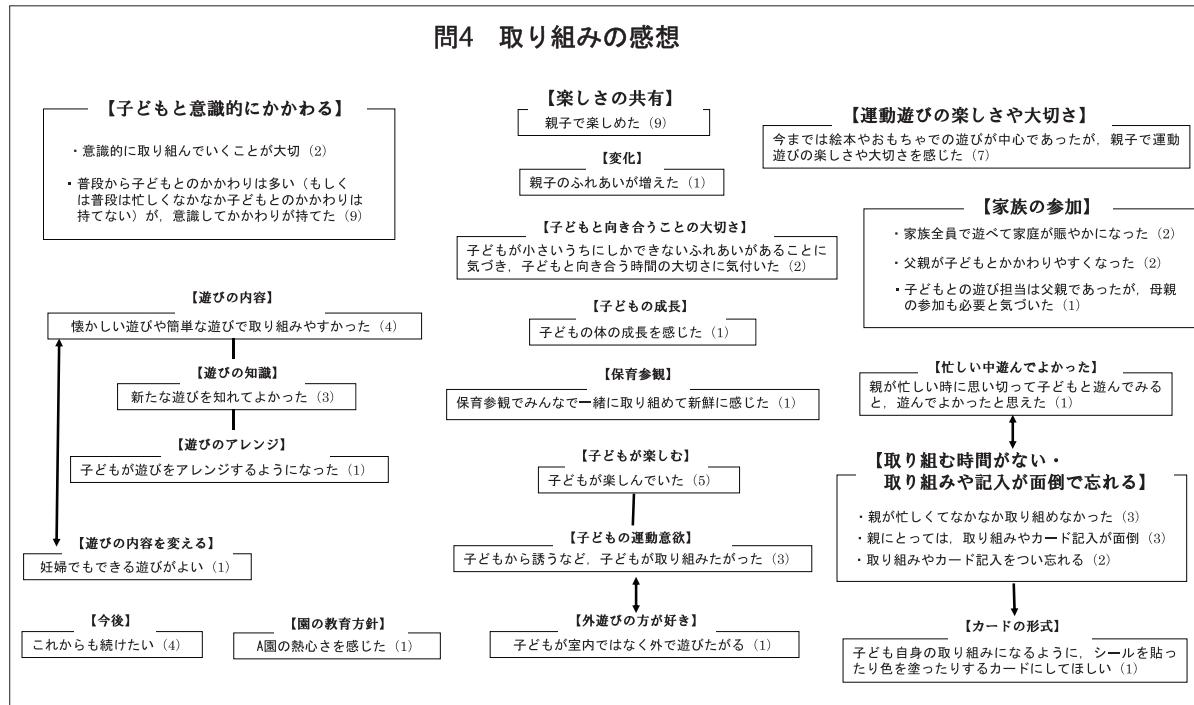


図 8. 問 4 の結果

4. 考察

以上の結果を踏まえて、継続型の親子運動遊びの取り組みにおける保護者の意識を考察する。

「取り組みの日数と頻度」から見ると、平日の取り組みが6月は5月に比べて低くなっている。『取り組み後のアンケート』問3の結果から平日の取り組みの時間帯を見てみると、午後の降園後から就寝前までの時間に取り組みが集中しており、夕食や入浴などの保護者の家事時間と重なっている。そのことから、取り組みが長期化すると、忙しい平日は保護者の取り組みへの意識が低くなってくると考えられる。これは、『取り組み後のアンケート』問4の結果の中に、「取り組む時間がない・取り組みや記入が面倒で忘れる」というカテゴリーが見られることからも分かる。一方、休日の取り組みは、5月・6月共に同頻度で取り組まれており、比較的取り組みの時間帯もばらつきがあることから、保護者の余裕のある空いた時間に取り組んでいることが分かる。

「各取り組み日の保護者自身にかかわる感想」から見ると、「体力が必要・子どもが重い・疲れた」という感想が最も多く、次いで「親子や家族で楽しめた」が挙げられ、「ふれあい遊びが心地よい」「うまく運動遊びができない」「部屋が狭くてできない」が続いていることから、保護者としては子どもの体重も重くなり体力的に大変な取り組みであり、カードの指示通りにはうまくいかなかったり、遊び場所の確保が家庭では難しかったりする中、それでも親子や家族で楽しさや心地よさを感じることができたのではないかと考える。それは、『取り組み後のアンケート』問1の結果からも、楽しく取り組めたことが伺える。また、『取り組み後のアンケート』問4の結果からも、園から取り組みを課されているために保護者は意識して取り組んではいるものの、結果として親子で楽しむという共通の体験を通して、保護者が子どもと体でふれあって遊ぶ楽しさや大切さに気づいたり、子どもの様子や成長に気づいたり、

親子運動遊びをこれからも続けたいという意識の変化につながったりしていることが分かる。

「取り組み相手の人数」と「取り組み相手の続柄」から見ると、ほとんどの子どもが家族の中の複数の相手と取り組んでおり、その続柄も多岐に及ぶことから家族全体で参加して取り組んだことが分かる。これは、『取り組み後のアンケート』問4の結果から、「家族の参加」のカテゴリーが見られたことからも、父親や母親の遊びへの参加をはじめ、家族が一体となって参加した継続的な親子運動遊びの取り組みが、家族のかかわりを生んだと感じていることが分かる。

5. おわりに

本研究は、継続型の親子運動遊びの取り組みの実態を把握し、その取り組みにおける保護者の意識について明らかにすることを目的としてきた。その結果、保護者にとって時間に余裕がない、保護者の体力的には厳しいなど、取り組みにくさはあったものの、意識的に親子で体のふれあいという共通体験をすることで、保護者も子どもも相互に楽しさを感じていた。また、取り組みの中で、子どもと体をふれあって遊ぶ大切さや、子どもの様子や成長に関しての気づきがあった。さらに、『親子運動遊びカード』の取り組みが家族全体のかかわりを生み出し、父親・母親それぞれのかかわり方の変容が見られた家庭もあった。

今後の課題としては、子どもの身体発達にとって、継続的な親子運動遊びの取り組みがどのような効果をもたらすのかについて考察することである。

【註】

1. A.Jean Ayres・佐藤剛監訳（1982）「第Ⅱ部感覚統合障害」『子どもの発達と感覚統合』pp.77-103 協同医書出版社
2. 中尾繁樹（2013）「第1章 今の子どもたちの身体の様子と社会的背景」『「特別」ではない特別支援教育 5 不器用な子どもたちの感覚運動指導』pp.7-16 明治図書
3. 三木成夫（2015）『生命形態学序説-根原形象とメタモルフォーゼ』うぶなす書院
4. 山口創（2017）『人は皮膚から癒される』草思社
5. 櫻木真智子・太田よし美・西田ますみ・築川悦美・桐川敦子（2014）「『親子で楽しむ運動遊び』の実践が子どもと保護者に与える影響に関する報告」『聖徳大学研究紀要』第25号 pp.143-151 聖徳大学
6. 寺田恭子（2010）「『親と子の外遊び』実践における成果と課題-3年を経過した地域開放事業から-」『プール学院大学研究紀要』第50号 pp.215-228 プール学院大学

付記

本研究は、平成29年10月22日に行われた「東海体育学会第65回大会研究発表」をもとに、加筆・修正したものである。